



〈発掘調査の概要〉

纏向遺跡の居館域を求めて・・・(纏向遺跡 162 次調査)

1. はじめに

この度、桜井市教育委員会では桜井市大字辻 64-1 番地において纏向遺跡の範囲確認調査を実施しました。この調査は平成 17 年度から継続的に実施してきました纏向遺跡及び纏向古墳群の史跡指定を目指した範囲確認調査の一つであり、纏向古墳群の範囲確認調査の目途がついたことを受けて集落部分の調査に着手したものです。

今回の調査地は昭和 53 年度に県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施し、一辺約 4.8 m×5.4 m の建物 (SB-101) や柵列 (SA-101) の一部が検出された纏向遺跡第 20 次調査地 (辻 64-1 番地) と同一地点であり、今回は第 20 次調査で検出された遺構群の全体像を解明するために前回の調査トレンチをも含めて再度の調査を実施したものです。

なお、調査は平成 21 年 2 月 3 日から平成 21 年 3 月 31 日の間に行われており、調査面積は 384.5 m²となります。

2. 調査地の位置と環境

調査地は標高 75 m 前後の東側から派生する扇状地上の微高地にあたります (図 1)。この微高地は太田北微高地と呼ばれているもので、微高地の南北には旧河道が流れていた事が判明してあ

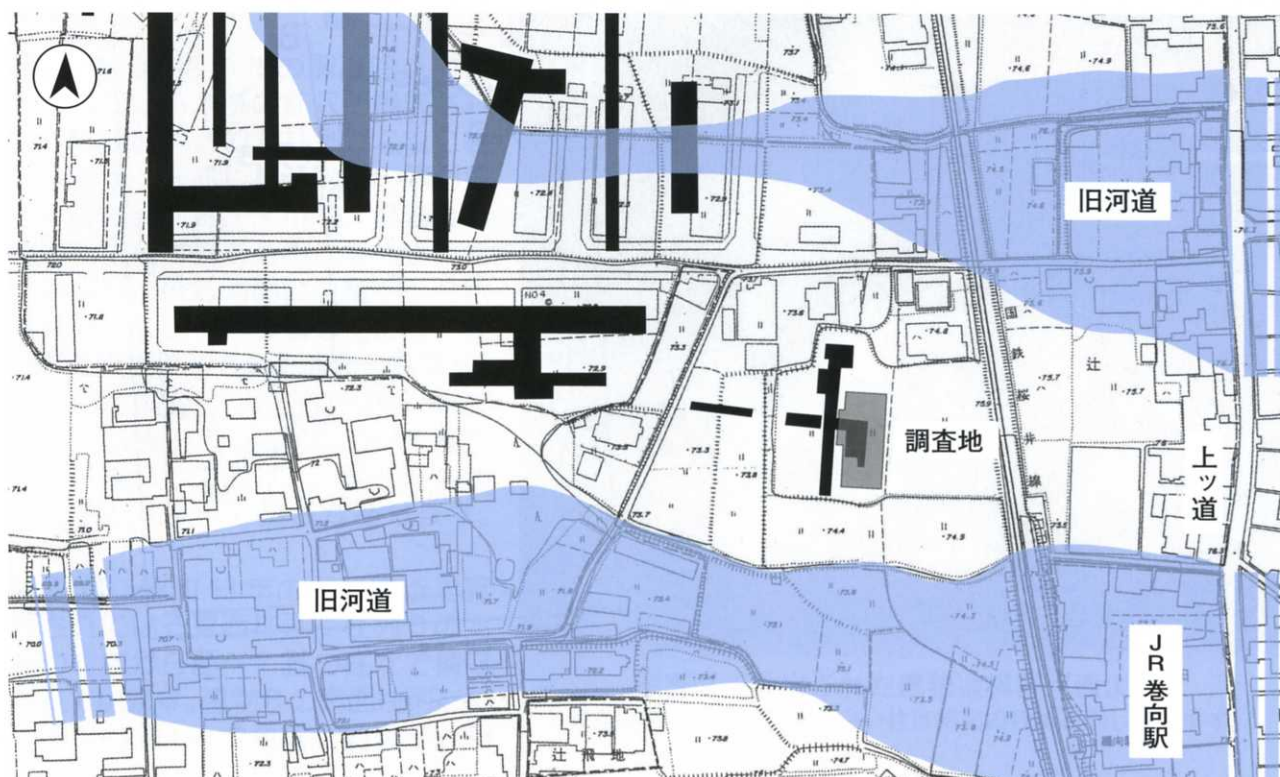


図 1 調査地位置図



り東西に長く南と北に存在する谷部分より約2m高い地形を形成しています。周辺は纏向遺跡内でも比較的古い段階（3世紀前半・庄内式期）の遺構が密集して分布する地域であり、先述した第20次調査においても庄内式期を中心とした多くの遺構が確認されています。

3. 検出された遺構

今回の調査では第20次調査の成果を受けて上層では3世紀後半の遺構面となる包含層Ⅲ上面を、下層では包含層Ⅲの下部において確認された3世紀前半の遺構面となる地山及び整地層上面の2面において調査を行っていますが、ここでは多くの柱列や建物群が確認された下層検出の遺構群について見てゆくこととします（図2）。

遺構面の状況 3世紀前半段階の遺構が存在する下層の遺構面は大きく分けて黄褐色粘質土（地山）・灰褐色砂礫（縄文時代後・晩期以前に形成されたとみられる堆積層）・黄褐色粘質土ブロックを多く含んだ灰褐色土（整地土）の3つの土壌から構成されています。調査区の中央部、建物

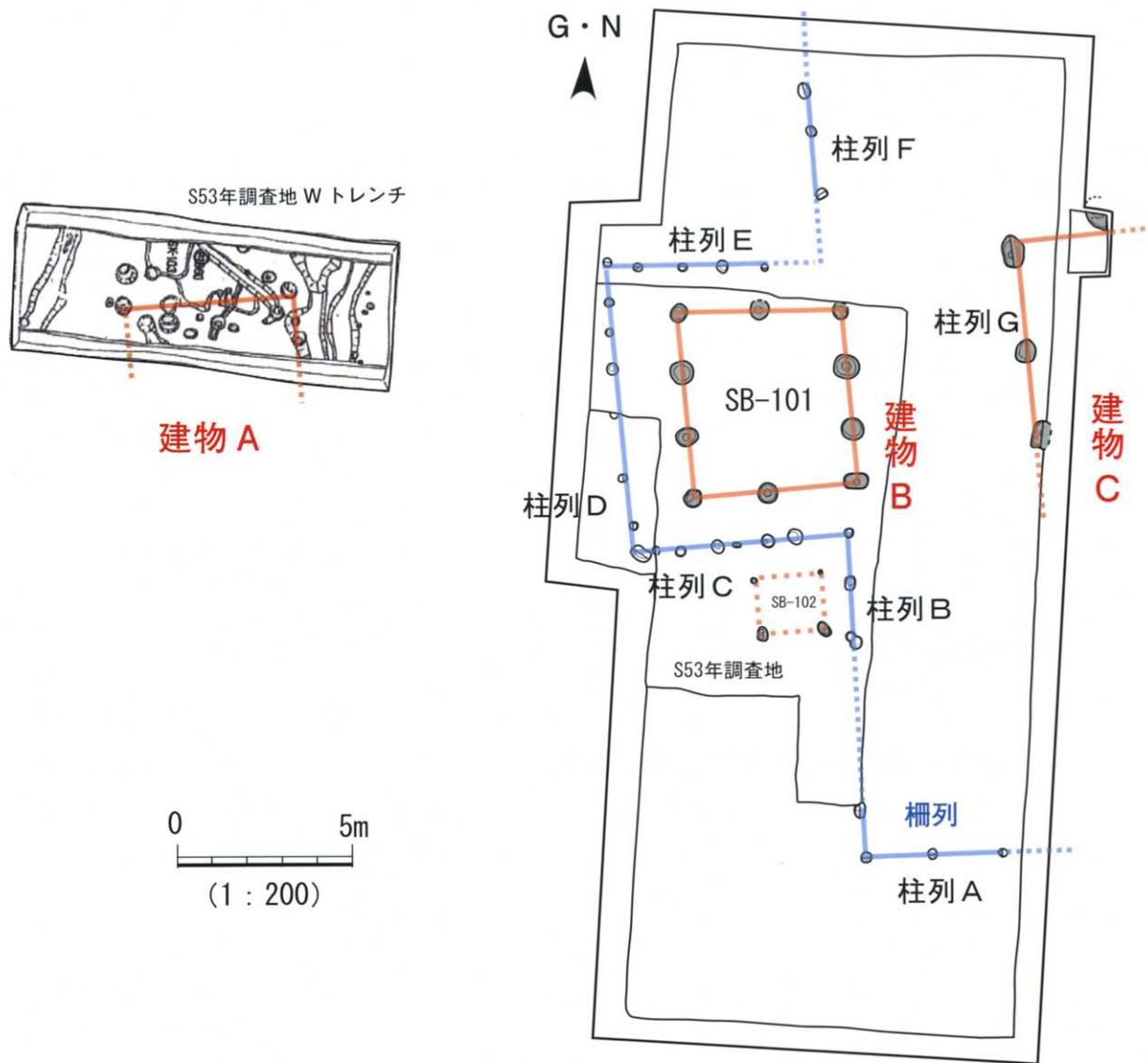


図2 遺構配置図

Cの柱列G南端に位置する柱穴より南にかけては調査区内では微高地内でも最も高い地点に位置するものとみられ、遺構面には黄褐色粘質土の地山が一部露呈しています。

さて、調査区の南半は南側に位置する谷部へと向かって地山が徐々に落ち込んでいく状況にありましたがこの上には縄文時代以前の堆積土とみられる灰褐色砂礫層が厚く被っており、下層遺構はこの灰褐色砂礫層上面において検出されています。

また、調査区の北半もやはり北側の谷部へと地山が徐々に落ち込んでいますが、この部分は整地土によって平坦面が造成されており、下層遺構はこの整地土の上面において検出されています。



写真1 調査風景（北より）

柱列A 調査区南半部において検出された東西方向に並ぶ3基の柱穴で構成される長さ4 m以上の柱列です。柱列の延長線上の西側からは柱穴が検出されていない事から西端は確認されていますが東側は更に調査区外へと延びる可能性が高いと考えています。

なお、最も西に位置する柱穴は柱列Bの延長上に位置しており、柱列Bと接続する可能性が考えられます。

柱列B 昭和53年の調査時点で確認されている3基の柱穴で構成されSA-101と呼称された柱列がこれに相当します。先述した建物Bの南面柱列との間隔は約1.4 mで、建物Bと同時期に築かれたものと考えられているほか、最も北側に位置する柱穴は柱列Cの延長に位置しており、柱列Cに接続するものと考えられます。

今回の調査では柱列Bの延長上、柱列A西端柱穴の北側において柱穴を1基検出しており、一連のものと考えると9.2 mの長さがあります。

柱列C 昭和53年の調査時点で確認されている東西柱列で柱列Bの北端の柱穴から西へ7基の柱穴で構成されています。建物Bの南面柱列との間隔は約1.4 mで今回の調査では西



写真2 検出された建物遺構群（西より）
黄色い柱は建物の柱跡で白い柱は柵列の柱跡を示しています。



